2Sp-11　　ドイツにおける『自由時間』の認識に関する男女比較 1
—雇用者にみられる『自由時間』の「始まり」と「終わり」に関する事例研究—

お茶大家政　柚木理子

【目的】「生活時間調査」に基づき、自由時間を時間の量的側面から研究する方法を用いる場合、行為者である主体の認識を知るには限界がある。さらにドイツにおける既存の「自由時間」研究において、研究者が定義する「自由時間」と生活者が考えている「自由時間」とのずれが指摘されている。本発表においては、「自由時間社会」といわれるドイツ（旧西）の生活者から見た『自由時間』の内容を研究する一環として、諸個人が『自由時間』という概念をいつ始まり、いつ終わるものとして認識しているのかを明らかにする。

【方法】1993年5月末～7月末、ルール地方X市周辺の男女ホ ワイトカラー雇用者を対象に約2時間、準自由会話方式によるインタビュー調査をドイツ語で行なった。本発表の分析対象者は、女性 8名（有配偶、同居子あり4名と無配偶・同居子なし4名）と男性7名（有配偶、同居子あり）の計15名。

【結果】『自由時間』の「始まり」についての認識のスタイルの変異のありようには、男女差が見られ、女性の間では配偶関係の有無による相異が見られる。雇用労働が終わり、帰宅すると『自由時間』が「始まる」との認識を持つのは、男性の分析対象者と女性の分析対象者の内の無配偶、同居子なしの女性である。これとは対照的に、有配偶、同居子ありの女性分析対象者は、雇用労働から離れるだけではなく、家事や子供の世話から手が離れてから『自由時間』が「始まる」との認識が見られ、二層化された認識構造にジェンダー格差の存在が想定される。また、『自由時間』の「終わり」についての認識には、『自由時間』の「始まり」に見られたような男女間の相違は見られなかった。